

あの日の 決断

岩手の経営者たち

西部開発農産

▽③△

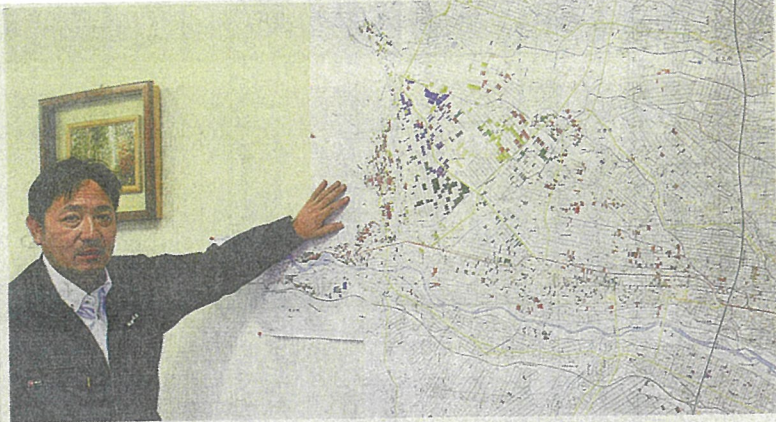
北

上市和賀町後藤の西部開発農産は平成に入ると、県農業賞や農林水産省内閣総理大臣賞に相次いで輝いた。農業法人として知名度が高まる一方、足元の経営は時に火の車だった。

「1億円の生命保険に入っていた。自殺しようかと思った」。前社長の照井耕一さん(74)は、20年ほど前の危機を思い出す。

作物が思うように取れず、累積赤字が3年で5千万円に達した。メインバンクだった農協からの追加融資が見込めない中、給与の支払日が迫っていた。

「ごまごま、だめか」。追い込ま



西部開発農産の耕作地を作物ごとに色分けして記した地図。北上市を中心に作付け地は3市1町に広がる。左は照井勝也社長＝北上市和賀町後藤・同社

急転直下 救いの融資 諦めない大切さ学ぶ

照井耕一さん

れて初めて、頭を切り替えられた。「死ぬ気だったら何とかなる」。地元の信用金庫に走り、1千万円の融資を頼み込んだ。担保はなかった。

3日後、急転直下の融資が決まった。信金には若い頃、知人の連帯保証人として300万円を返済した苦い記憶があった。

信金は、当時の照井さんの対応を覚えていた。年月を経ても、個人への信用は続いていた。「1千万円で、あの世にいかなくて済んだ。自殺とは、今考えるとばかな考えだった」

その後、大豆の大豊作などがあり、3年で累積赤字を解消した。「天気が悪くて作れなかったでは、理由にならない。大切なのは、頭を使うことと、前向きにやる意欲」。照井さんが窮地から学んだ教訓だ。

経営危機を脱した後も、資金繰りの悩みは続いた。作付けが広がったが、農地の大半は「借り物」。照井さんら創業メンバー3人の宅地を担保にした農協の融資5千万円では、とても足りなかった。

2004年、農林漁業金融公庫(現日本政策金融公庫農林水産事業)との取引拡大が、転換点になった。着任のあいさつに来た盛岡支店長に資金難を打ち明けると、数カ月後、8千万円の融資が決まった。この時も担保はなく、創業メンバー3人の連帯保証のみだった。

その後、農協からの借り入れもなくなり、財務は劇的に好転。「農協から高い資材を買わなくて済み、コメも大手商社に高く売れるようになった。規模拡大が進むと、取引条件はさらに良くなった」。経営の大規模化が加速していった。

西部開発農産はコメ、麦など土地利用型農業の傍ら、畜産や加工品製造を加えた複合経営で、高い評価を受けてきた。